

日本臨床外科学会 国内外科研修報告

がん研有明病院大腸外科での国内外科研修を終えて

兵庫医科大学下部消化管外科

木村 慶

令和4年2月14日から2月25日までの2週間、日本臨床外科学会国内外科研修制度を用いて、がん研有明病院大腸外科で国内研修をさせていただきました。年を明けてからCOVID-19の感染の著しい拡大もあり、研修ができるのか不安に思っておりましたが、その不安が私自身のCOVID-19感染という形で訪れました。当初は3週間の研修の予定でしたが2週間に短縮で研修の許可がありました。このような情勢の中、多くの方々の支えがあり貴重な機会をいただけたことを、日本臨床外科学会国内外科研修委員会委員長 高山忠利先生、がん研有明病院院長 佐野武先生、大腸外科部長 福長洋介先生、スタッフやレジデントの皆様には心から感謝申し上げます。

私は現在兵庫医科大学で日常診療にあたっておりますが、200例前後の症例数をスタッフ8人であっております。大学病院ではありますが、鼠径ヘルニア、痔核、直腸脱などの良性疾患や、虫垂炎、イレウス、消化管穿孔などの緊急手術も多数行わなければならない、全国一の大腸癌症例を誇るがん研有明病院が羨ましくもあり今回の研修を希望しました。現場に入り、大変であることは火を見るより明らかで、私と同世代のレジデントの先生が血のにじむような思いでその土台を支えていることがわかりました。その中でも病棟医、カンファレンス進行、各種人員配置などは綿密に行われておりました。また、カンファレンスの事前準備に関しては参考にしたい点が多くありました。術前カンファレンスでは、多数の症例を抱えているため、1例1例をドラダラするのではなく、重要事項が端的にパワーポイントにまとめられており、稀少な症例では参考文献も付加するなど非常に印象的でした。おろそかにされがちな術後の切除標本提示や合併症や問題が生じた症例のフィードバックについても討論されるなど、忙殺される手術、業務の後に作成していることも考えると頭の上がない思いでした。日常業務の中で見出されるclinical questionやプレゼンの習慣がそのまま学会発表や論文作成につながると思い、ぜひわれわれ若手スタッフや大学院生にも取り入れたい内容でした。今回の研修中に福長洋介部長による技術認定医取得に向けたビデオカンファレンスに参加することができました。疲れている中でもみんなの目は輝いており、活発な討論がなされ、レジデントの先生方がいかに手術が好きかという外科医の原点を垣間見ることができ、私の身も引き締まる思いでした。

このようなhigh volume centerでのカンファレンスには非常に興味がありすべてのカンファレンスに参加させていただきました。消化器外科カンファレンスでは食道外科、胃外科、肝胆膵外科の先生も加わることで、レベルの高い議論がなされ、新たな視点が広がる非常に興味深いものでした。また大腸外科カンファレンスでも内科、放射線科、呼吸器外科、肝臓外科、化学療法科が共同し、画像診断から術前術後の治療方針まで、患者にとってさらに良い方法がないかを話し合う姿勢は患者診療において最優先すべきことであり、これが全国一につながるのであろうと感じました。

手術に関しては、並列で何列も手術を行っているため、ある程度症例を絞らなければならないことが悩みの種でした。私は今回、ダビンチコンソール手術をはじめたばかりで非常に経験が浅く、苦悩も多かったため、ダビンチ手術を中心に見学させていただきました。ダビンチ手術が、今後の大腸癌手術の柱となることは間違いなく、技術習得は必須です。セッティングから、中枢側の郭清の肝、血管剥離の肝、

TMEの真髓、pitfallまで山口智弘先生より指導していただきました。夜遅くになっても私が悩んでいたところを論理的に指導していただき本当に感謝しております。今後はがん研で得た知識を基に、自分での実践を経てダビンチの定型化に向けていきたいです。腹腔鏡手術の執刀数は他の病院の比ではないと思いますが、どのスタッフの先生も層の見極めが非常に早く、レジデントが助手をしながらの執刀、ある時はレジデントに執刀させながらも、難症例であっても確実に時間通りに遂行される場所は素晴らしく感銘を受けました。手術中の対話を聞いてもいかに頭の中に3Dのイメージを持って考えながら手術をしていることが良くわかりました。向井俊貴先生のbulkyな直腸癌の手術での術野展開や、側方リンパ節郭清での郭清範囲の決定、その手術を行うための骨盤解剖の認識は私が理想としているそのものでした。また、長嵩寿矢先生の直腸癌局所再発に対する重粒子線治療前のスパーサー留置は、今回一番の収穫でした。直腸癌局所再発に対する骨盤内拡大手術、さらに重粒子線治療との併用は私が最も興味を持っている分野です。当院で数多くの直腸癌局所再発症例はありますが、スパーサー留置を目にする機会がなく非常に勉強になりました。局所再発手術でのいわゆる線維化し剥離層がない層での電気メスのタッチには感服しました。また、重粒子線治療を行うQST病院の先生にも偶然遭遇することができ、局所再発の治療方針を議論する良い機会となりました。

当院では下部進行直腸癌ではupfront surgeryが多く、日本のエビデンスを世界に発信できるがん研有明病院のTNTには非常に興味がありました。秋吉高志先生はCRM確保にこだわった手術手技だけでなく、私には全く理解できないレベルでのMRIの読影能力、下部進行直腸癌の緻密なアルゴリズム、Watch & Waitに向けた新しい臨床試験など低侵襲の極みを見ることができました。

コロナ感染から研修の2週間、外科医になって一度も丸々1カ月手術に入らなかったことはありませんが、この機会を通じて多くを立ち止まって考えることができ、さらにがん研のレジデントの先生方には特にがむしゃらに頑張る姿勢を思い出させてもらいました。この国内外科研修で得たことを兵庫医科大学でも取り入れていきたいと思えます。

最後にはなりますが、この場を借りて福長洋介部長を始めとしたがん研有明病院大腸外科の皆様には感謝申し上げます。また、ご推薦いただきました日本臨床外科学会兵庫県支部長の福本巧教授、兵庫医科大学消化器外科学講座の池田正孝教授、研修中の不在の間、小生の外来・入院患者の代診をしていただきました当科医局員の一同にお礼申し上げます。誠にありがとうございました。